

著者に

聞く 島田賢二郎

責任に時効なし 小説巨額粉飾

責任に時効なし



アートデイズ
1800円+税

—— 小説巨額粉飾 という本が話題となっている。著者の島田賢二郎氏は、元カネボウ常務。「存じのよう」にカネボウは、産業再生機構入りしたあと化粧品部門が花王に譲渡され、残りの部門はクフシ工に生まれ変わったが、その名門企業の寿命に終止符を打つきつかけとなつたのは、長年続いた粉飾決算だつた。島田氏は財務・経理の責任者として、その実態を誰よりも知る人物で、二〇〇五年には元社長とともに逮捕され、(のちに不起訴処分となる)。本書は、そのカネボウの破綻をモデルに書かれたものだ。

「明日はわが身」

—— 島田さんにとつて初の著書ですが、売れているようですね。

島田 おかげで、ビジネス街の書店での売れ行きが好調で、八重洲ブックセンターでは二位、丸善では一位となりました。アマゾンでも、最高

位で五位にまでなつています。そんなに反響があるのかと、私自身とまどつているのが正直なところです。

—— 本書では、島田さんがモデルと思われる経理財務担当の主人公が、経営トップの粉飾決算の指示に抵抗する姿を描いています。その姿が、サラリーマンの共感を呼んだのではないかですか。

島田 「明日はわが身」—— そう考

えた読者の方も多いいらしたようですね。会社というものは、外に対しても一枚岩でなければならないわけですが、だからその内部では、社会の正義と、会社の正義が違つことは珍しくありません。その間で苦しんでい

るものが現実のサラリーマンなのではないでしょうか。この「小説」では

そこを丁寧に描いていますから、共



しまだ・けんざぶろう
1946年生まれ。関西学院大学経済学部卒業、早稲田大学大
学院(商学研究科)修了。鐘紡(のちにカネボウ)入社。
2000年取締役、02年常務(財務経理担当)、04年退社。05年
7月に有価証券報告書虚偽記載の疑いで逮捕。しかし粉飾
に反対していたことが明らかになり不起訴となつた。

牲を払つたにもかかわらず、その後今まで一〇件以上の粉飾決算が見つかっている。そしていま、経済環境は一気に悪化しています。カネボウの場合、日本経済の失われた一〇年がその背景にあつたわけですが、米国のサブプライムローンから始まつた世界同時不況で、同じような状況になりつつあります。

そこで、この本によつて粉飾決算の実態をつまびらかにすることによって、経営者がその指示をしにくくなるのでは、との思いもありました。それによつて次の粉飾にストップをかけることができるかもしれません。

カネボウ事件の本質

島田 それも一つです。でももつと、なのですか。

—— それがこの本を出された動機
—— この本のメインタイトルは「巨額

感を呼んだのかもしれませんね。

—— 正直な数字を出せば会社は倒
しきれない。存続を図るには粉飾
生きてきたサラリーマンにとっても
難しい判断を迫られます。

島田 カネボウは一二〇年もの歴史
があつた名門企業です。それでさえ、
簡単に終焉を迎えてしまいました。

ただ、その過程において、事業構

造を大胆に変えるといった手段を講

じていれば、銀行だって協力してく

れたのです。これはどの会社にもあ

ります。でもその犠牲をいとわなければ、

企業は存続できるのです。

ところがそれをやらないで粉飾に

走つてしまつた。実は粉飾決算をし

て得をする人などどこにもいません。

下手をしたら税金をつぎ込むこ

とになって国民にまで迷惑をかけて

しまつ。それでもやつてしまつのは、

経営者が自己保身をはかるためで

す。粉飾というのは外からはわかり

ません。ということは、倒産さえし

なればバーンいけます。ですが、

権力者で自己愛の強いトップは

やつてしまつのです。

—— 確かに、昨今でも粉飾決算に

よつて立件される例は少なくあります。

そこを丁寧に描いていますから、共

感を呼んだのかもしれませんね。

社長は知つている

大塚英樹 著

—— ダイエーの創業者の中内功氏に二〇年以上密着し続けたことで有名なフリーライター大塚英樹氏の最新著作。大塚氏が過去インタビューした経営者五〇〇人の語録の中から「これぞ社長の一言」という言葉を厳選、紹介している。キヤノン・御手洗富士夫氏の「仕事の目的は利益、事業は手段にすぎない」、アサヒ飲料・荻田伍氏の「つらいことはおれがやる」、日本興業損害保険・松澤健氏の「ぼくはほめるやつは嫌いだ」、本田技研工業・福井威夫氏の「とんがつたことをやりたい」、東京海上火災保険・竹田晴夫氏の「ずいぶんがつたことをやりたい」など、経営者の個性がよくわかる。

弁護士としてドミニカ日本人移民問題、フィリピン残留日本人問題、日比混血児問題、諫早湾干涸干拓問題などを手がけた西田研志氏。『サルでもできる弁護士業』『弁護士業界の革命児、起つ』と本書を同時に出版した。弁護士が不足しているため、解決すべき問題の三%しか対応できていない現状を

眠れる二〇兆円マーケットへ法務ビジネスという名の埋蔵金、

西田研志 著
社長は知つている 大塚英樹

講談社 1400円+税

コカ・コーラに挑んだ男 谷田利景 著
ボッカココ・ボレー・ショーン創業者である谷田利景氏の自伝。「缶入りコーヒー」も冷温兼用式の「コールドORホット自販機」を発明したのも、なんとも大きな理由は、ノンファイクションよりも小説形式にしたのは、一つには惣田の情がありました。それよりももっと大きな理由は、ノンファイクションよりも小説のほうが、リアリティを持たせることができます。ノンファイクションではなく小説式で書かれています。また、社名や個人名などもすべて架空の名前です。ノンファイクションではなく小説式で書かれていました。

—— 粉飾事件を通じて内容が明らかになつたのではないですか。

島田 そんなことはありません。確

かに最後の経営陣の粉飾にはメスが入れられたかもしれません。裁判というのは時効になつた部分について

は明らかにはしません。そしてカ

ネボウの粉飾とは、最後の数年間だけ行われたのではなく、ずっと以前から行わってきたものです。そこにこの事件の本質がある。

ただ、その作業は苦しいものでもありました。人間を描くといふこと

は事件の真相と向き合ひながら、自分自身も素っ裸になる必要がありま

したから、覚悟を決めるまでには、

それなりの時間が必要でしたね。B

指摘。すなわち、困つている日本人のほとんどが弁護士に放置されているのだという。ということで本書では、法務ビジネスの開放の必要性を説いています。開放によって誕生するのが二〇兆円規模のマーケットだというのだから驚いた。

この事件の本質を明らかにしよう

とすれば、経営トップの精神構造や感情にまで踏み込まなければなりません。そのためには人間の内面を描かなければならぬ。それには小説のほうに向いているのです。

ただ、その作業は苦しいものでもありました。人間を描くといふこと

は事件の真相と向き合ひながら、自

分自身も素っ裸になる必要がありま

したから、覚悟を決めるまでには、

それなりの時間が必要でしたね。B

この事件の本質を明らかにしよう

とすれば、経営トップの精神構造や感情にまで踏み込まなければなりません。そのためには人間の内面を描かなければならぬ。それには小説のほうに向いているのです。

ただ、その作業は苦しいものでもありました。人間を描くといふこと

は事件の真相と向き合ひながら、自